

---

# 桜花乱舞

煉

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜花乱舞

### 【Nコード】

N6110N

### 【作者名】

煉

### 【あらすじ】

恋愛ファンタジー。泰恵<sup>タイケイ</sup>7年、3月下旬。

記憶喪失となった少女は、騎士団に所属する8人と失った記憶を求め。

しかし――

## 一章 一話

潮風が栗色の長い髪を撫でる。

少し花を開いた桜が突風でその薄紅色の花を散らす。それは少女を包み込むように舞い、海へと降りた。透明に近い海水を薄紅色が染めていく。

少女は静かにその中へ歩み行く。何処か儚げで、異様に白い肌が少女をこの世の者では無い様な錯覚を引き起こす。

まだ冷たい海水が少女の体から体温を奪う。

それでも歩みを止めず、気付けば肩まで海水に埋もれていた。虚ろで何も映さない茶色の瞳。長い髪が水の中で優雅に踊る。水面が鼻の下まで来た。怖いなど感じない。感じるのは水の冷たさだけ。新たに一步踏み出した瞬間、少女は海の中に吸い込まれる様に海面から姿を消した。

海底がいきなり深くなったのだ。

少女は足掻く事もせず、水に体を委ねる。息が口から漏れた。少女は薄れ行く意識の中で何かを呟き、頭上に見える海面へ腕を伸ばす。足掻こうと思ったが既に時遅く、海底に背が付いた。

砂埃が巻き起こり海面が見えなくなる。魚が少女の周りから遠ざかっていく。

（あたし……死ぬんだ……やっと）

海水とは違う物が目から零れた気がした。ゆっくり目を閉じる。

先ほどまで作られていた泡が無くなり、口元は微かに笑みを浮かべ動かなくなった。

凄まじいクラクションが空に響く。鳴り止まない。信号は青なのに車は一向に進まない。気の短い運転手から発せられる怒号が増えるのと比例してクラクションも増えていく。信号が赤になり別方向

の信号が青になると、怒号やクラクションが止むことは無い。それどころか逆に増える一方だ。田舎町の交差点なのに車の量が多いのは連休中だからだろう。

煩さに眉を歪め眉間に皺を寄せながら目を開き、自分の状態に啞然とした。少女は交差点の中央で一人佇んでいた。クラクションと怒号の原因は少女にあったのだ。

少女にぶつかる寸前で車が大量に止まっている。

少女はわけがわからず急いでその場から離れる。

クラクションが止み、信号通りに車が進み出す。空き缶や空のペットボトルが少女に向かって投げられる。いくつか少女に当たり小さな悲鳴が漏れた。

怖くなってその場に崩れるように座り頭を抱える。どうしてあんな所にいたのか思い出せない。必死で思い出そうとしても、恐怖で思考が空回る。その中でふと、ある事に気付き周りを見渡す。ここが何処かも分からないのだ。思い出せる事が何一つとしてない。それがさらなる恐怖となり声にならない叫び声を上げる。

叫び声が消えるとほぼ同時に雨が降り出した。それはすぐにバケツをひっくり返したように勢いを増す。クラクションと怒号の騒がしさが雨の音へと姿を変えた。

鉛色の空を見上げ少女は動かなくなった。全身ずぶ濡れになり服の感触が気持ち悪い。それでも動こうとしないのは、頭がスッキリするような気がしたからだ。ごちゃごちゃになってしまった頭を冷やしたいのだろう。

しばらくして運転手達と呼んだであろうパトカーのサイレンが鳴り響く。それは少女のすぐ近くで止まりパトカーへと入れられる。

女性警察官に抱き締められた少女は、ようやく感じた人の温もりに涙を流す。毛布にくるまれ警察病院へと運ばれた。入院着に着替えさせられ軽く診察を受けた後、カウンセラーとの対話、事情聴取、それらを淡々とこなす少女。

その間、警察署では身元確認が行われていた。少女を病院へ運ん

だのとは違うパトカーが、近くのバス停に置いてあった鞆を持ってきたのだ。その中には、現金5万円と保険証などのカード類が入った財布、薄く折りたたみ式で小さな白い携帯、少女が通っているであろう高校の生徒手帳。他にもハンカチなどが綺麗に入っていた。

警察はまず生徒手帳から学校の連絡先を探しアポを取ると学校へ赴いた。しかし、少女は3ヶ月前に学校を辞めており、書類などは処分された後。元クラスメイトの中に友達は何らず、いつも図書館で読書をしていたと言う。辛うじて元担任から家柄などを聞き出す事に成功した。それでも分かったのは2つだけだ。少女の親は離婚していて、引き取った母親は他界。現在は1人暮らし。身内が居ないため、資金が不足し学校をやむなく退学。

少女は記憶を失っているのでカウンセリングの意味も無く、入院を頑なに拒んだ。そのため、警察は少女に元担任からの情報を伝え、乾かしておいた服に着替えさせると家まで送った。鞆の中には鍵も入っていたため家には難なく入れた。

少女は手探りで電気のスイッチを探し明かりを点ける。しかし、部屋の配置が全く分からない。新築の家に来た気分だ。鞆の中からメモ帳とボールペンを取り出し、一通り部屋を周りながら地図を作成した。自室と思われる部屋に荷物を置きベッドに飛び込む。途端に疲労が押し寄せ眠気が少女を襲った。

ロックが掛けられ待ち受けしか見られない携帯を握り締める。待ち受けにされた一枚の写メ。それを見ていると何故だかすぐ落ち着くのだ。満開の桜と嬉しそうに笑う少女。少女は携帯を抱き締めるように体を丸め眠りについた。

少女は3時間もしないうちに目を覚ました。体が重く体調が優れない。再び眠ろうと目を瞑るが、完全に目が覚めてしまったらしく、眠る事が出来ない。ゆっくりと体を起き上がらせる。背筋に寒気を感じ振り向く。

何も無い。

違和感を覚え、薄いロングコートに袖を通した。ベッドから降りると辺りを見回す。やはり何も居ない。部屋を出ると右手にある階段を降りていく。軋む音がやけに響いている。月明かりを頼りに通路を進みキッチンへ向かう。グラスいっぱい水を入れ一気に体内へ流し込む。暑い訳でもなく逆に寒いのに玉汗が浮かんでいる。家の中に居るのが怖くなり外へ出た。

それでも違和感は消えない。まるで背後に纏わり付いているかの様。周りの地形が分からない。だが、この場に居るよりマシだとばかりに体が自然と歩み出した。何かから逃げる様に。

歩みが止まり唐突に頭から危険信号が出た。挟まれた、と。何にかは少女も分からない。何か少女に告げているのだ。

少女はゆつくりと民家の塀へと後退る。追い詰められていく。

「ころ、され……る」

怖くて涙が出た瞬間、暗闇が燃え上がった。

目を見開く暇も無く腕を掴まれ走り出す。小さな悲鳴が出たが風に消される。一瞬の出来事で頭が付いて行かない。時々、刀の様な物が煌めく。闇を切り裂いているかの如く刃が動く。

少女は恐る恐る前を見た。

桃色のライダースジャケットの袖は肘まで捲り上げられ、下はジーンズ。漆黒のような短い黒髪。闇夜でも生える白い肌。

息も上がっていないらしく、走っている音しか聞こえてこない。

「お前、名前は？」

微かにしか聞こえないほど小さく、どこか力強い声。少女は自分が自分を引っ張っている者の声だと気付くのに時間がかかった。

返答が無い事に疑問を浮かべたのか、その者は少女の方を振り向く。真っ赤な血のような色をした瞳に、少女の鼓動が僅かに高鳴った。

少女は慌てて返答しようとするが唇が震えて上手く声が出ない。

「し、らい……し……い、な」

思った通り途切れ途切れにしか言葉が出なかった。

「伊那か。何でこんな夜中に歩いた？」

青年は再び前を向く。

答えが浮かばず俯く。自分でもよく分からないのだ。この状況を招いたのは自分自身かもしれない、家に居れば良かったのかもしれない。

そんな事を考えている間に公園へ辿り着く。二人は立ち止まる。

嫌な感じは消えていないが、暖かい雰囲気も漂っていた。伊那はそれを聖域みたいだと感じた。街灯で明るいからかもしれない。

「あの、ありがとうございます」

お礼を言っていない事に気付き頭を下げる。微かに青年は眉を寄せるが、すぐに安心させる様に表情を和らげる。

「囲まれていたのは気付いていたのか」

「あつ……見えないですが……何となく感じて」

刹那、風が止んだ。

青年は刀を握り直し走って来た道を見つめる。伊那もそれへ顔を向けた。目を凝らし、それを見逃さないように見る。胸騒ぎが強くなり胸元を掴む。

一瞬、空気が揺れた。息を飲み青年を見る。伊那を守るように立つ背中が伊那に安心感を与える。

空気の揺れが段々と激しさを増し、ドアでも叩いているかの様だ。それに比例して恐怖が伊那を支配していく。名も分からない青年の服を掴み、目を固く閉じる。自分では抑えられないほど体が震え出す。

それを感じたのか、伊那を抱き寄せ、刀を構える。

鍛えられている筋肉の感触を感じ、不謹慎だと思いつつも胸が高鳴る。それを感じる余裕も出て来た。暖かい温もりに縋る様に青年の体に腕を回す。

とうとう空中にひびが入り、伊那はさらに強く青年へしがみつく。頭を撫でてくれる手に涙が出て来る。

ひびが徐々に広がっていく。

微かに舌打ちが聞こえ、伊那は顔を上げる。青年と目が合い頷きあう。一步、また一步と後ろへ下がる。

「榊」

下がりながら伊那の耳元で囁くような声が響く。それが青年の名前だと気付くまで時間がかかった。

「日比谷榊」

フルネームを教えられ軽く会釈する。榊の顔にある余裕。だが、状況は悪化していくのみだ。伊那には余裕など微塵も無い。

遂に空中のひびが割れ、破片が光となり消えていく。再び冷たい風が伊那の髪を撫でる。叫び声のような風が二人の体温を奪う。頭が逃げると叫んでいるが、足が竦んで動けない。

「伊那だったな。裏世界に巻き込まれなくなったら目を瞑り耳を塞げ。俺が肩を叩くまでだ」

伊那は言われた通りにする。榊の体が伊那から離れ、冬なのに暑さを感じた。それはすぐに治まり、断末魔のような風が伊那に針の如く突き刺さる。固く目を閉じ飛ばされないように踏ん張る。

風と嫌な感じが消えていく。

肩を二度軽く叩かれた。伊那はゆつくりと耳から手を退け目を開く。辺りは静けさを取り戻し、寒さが体を震わせる。空中のひびも消えていた。

あまりの変化に目を丸くさせる。そんな伊那が可笑しかったのか、榊は笑い出す。一気に疲れが押し寄せ地面に座り込む。その横に榊も座った。

再び静寂が訪れる。話しかけようと榊の方を向くが、月明かりに照らされる横顔の綺麗さに見とれてしまった。手に残る温もりが先程までの出来事を思い出させる。自分でも分かるほど鼓動が早い。体を抱き寄せた腕の力強さ、鍛えられた筋肉の感触。思い出すほど顔が赤面していく。

「大丈夫か？ 顔が赤い」

榊のひんやりとした手が額に当てられる。無意識に体が跳ね上がり、恥ずかしくなって俯く。

熱いな、小さな榊の声が微かに聞こえた。

大丈夫と言いたい声が出せない。夜の風が身に染みる。いつの間にか吐く息が白い。榊の冷めた手を温めようと両手で握り締め顔を上げる。途端に目が合う。心なしか榊の顔も赤い気がしたが、よく見る前に目が逸らされた。

「こ、こんな時間に出歩くな。その、この時間は奴らがもつとも活動的になる時間だし、俺だって助けに来れるか分からないんだ」

伊那は小さく頷きそのまま俯く。何か目的があつて出歩いていたであろう榊の時間を使わしてしまったことに罪悪感が芽生え心を支配する。

そこで、ようやく疑問が浮かんた。何故榊が出歩いていたのか。裏世界という言葉が木霊する。裏世界に巻き込まれなくなかったら。その言葉ばかりが頭に浮かぶ。

聞いてみようと思顔を上げた瞬間。あの嫌な胸騒ぎがまた起こった。それは榊も同じらしく、立ち上がると伊那の腕を掴み引つ張り上げる。

同時に壁が出来たかのように風が吹かなくなった。

「大丈夫だ。あれはここに入れない」

入れない、とはどういう意味なのか考える余裕など伊那には無い。体が震え立っているのが精一杯だ。頭に何かが浮かんたが、深く考える余裕も無い。

嫌、余裕が無いのでは無い。深く考えるのを拒否しているのだ。思い出すな、と。心の奥底で、強く、せき止める。

不安が押し寄せ榊を見上げる。榊の表情は見えないが顔の向きがピクリとも動かない。その先を見るが、伊那には空気が揺れている光景しか見えない。先程のようなひびはまだ入っていない。だが、時間の問題なのは伊那でも分かってしまった。

## 一章 第二話

入れないと言うことは、見えない壁でもあるらしい。先程のひび割れはその壁に入った物だった。つまり、また割れる可能性の方が強いという事にもなる。

それが、時間の問題と分かった理由だ。柵と自分を守っている物はそれしか無い。割れないように祈る事。それが伊那に出来る唯一の事だ。

その祈りも虚しく、見えない壁が音を立てて割れた。半径5cm程の隙間から冷たい風が吹く。

柵は咄嗟に刀を構え伊那の前に立つ。

途端に隙間が瞬く間に修復され、見えない壁は元通りになった。

先程の壁とは少し違うらしい。

再び訪れる静寂。

嫌な感じは未だ消えておらず、どこから様子を窺っているのだろう。

気配のような物が感じられても、居場所までは分からないのだ。

それは柵も同じらしく辺りを見回している。

伊那も辺りを見回すが、そもそも見えない相手を見つけられるはずなど無い。

柵は構えを解き前髪を掻き上げた。その表情には若干焦りが浮かんでいる。小さく溜め息を吐き刀を地面に突き刺す。そんな事をしで刀がダメにならないか気になったが、本人が気にしていないようなので聞かない事にする。

「結果が強すぎだ。音まで……」

柵の弦きはよく聞き取れ無かった。首を傾げる伊那に気付き、「何でも無い」と言うように微笑む。

余計な詮索もしない方が良い。伊那にはそう言っているようにも感じられた。それに少しの寂しさが浮かぶ。

次の瞬間、榊の目つきが鋭くなった。それと同時に嫌な感じを自分の真下から感じ、伊那は反射的に榊へ手を伸ばす。その手が榊へと届く前に全身が動かなくなった。何かに締め付けられているような痛みさえ感じる。だが、何も見えない。

締め付けは徐々に強くなっていく。何が起きているのかも解らず、歯を食いしばり痛みに耐える。

「伊那あつ！」

榊の声に答えようとするが、口を開いても呻き声しか出せない。

伊那は声を出すのを諦め、代わりに笑みを浮かべようとするがこれも失敗した。自分なりには上手く笑ったつもりだが、榊の表情が悲痛に歪んだのだ。それだけで、笑えなかった事が分かる。

「あ、はっ……」

首を締められ息が出来ない。目を固く閉じ動く右手を榊へと伸ばす。どんな状況が確認しようと片目を開ける。

刀を両手で構えたまま榊は唇を噛み締めていた。迂闊に近付けないのか一歩も動いていない。焦りを浮かべ伊那を拘束している何かを睨んでいる。

「日比谷とその彼女、動くと言字通り首が飛ぶぜー！」

声が聞こえたのと同時に体が何かから解放される。いきなり息が出来るようになったため軽く咽せた。倒れると思うより早く誰かに抱き締められていた。

何が起きたか分からず辺りを見回す。抱き締めている腕に気付くと顔を上げ、その人を見る。

幾重にも着けられたネックレス。水色のシャツにピンクのタンクトップ。茶色のズボンには裾が膝まで捲り上げてある。オレンジのベルトにはサングラスが掛けられていた。

紫の髪が風に揺れ、桜色の瞳と目が合う。どこからどう見てもチャライ男性は榊に目配せしその場から離れる。

榊の刀が怪しく煌めき、次の瞬間には嫌な感じが消えていた。

刀を鞘に収めた榊が2人へと歩み寄る。と、伊那の腕を掴み自分

の方に引く。

訳が分からず男性を見るが、何やらニヤニヤとしている。対して榊は敵意を剥き出しにして男性を睨んでいた。

どうしたらいいか分からず、大人しく榊の腕に収まっている事にし、鼓動が高鳴るのを必死に抑える。2人を交互に見るが2人は眉一つ動かさない。2人の視線がぶつかっている所から火花が出ている気がし、話しかけるのも躊躇われる。

壁が消えたようで風が三人の髪を靡く。榊からようやく解放され内心安堵する。冷たい風が榊の温もりを冷ましていく。離れるとやはり寒い。体を震わせると、男性が足音をわざと立てながら近付いて来る。

それを阻止するかにように榊は男性の前に出た。並ぶと男性のすらりとした長身がよく目立つ。

「よお、日比谷！ お前が苦戦してんの見るとさらにいじめたくなる。俺がいるのに他の女とデートするなんて……」

場が固まる。伊那はゆっくりと二人から距離を取った。二人に気付かれ無いようにしながらも1人で呟き始め、明らかな現実逃避を始めた。

盛大な溜め息を漏らす榊。伊那が現実逃避を始めたのに気付いたらしい。

「あー……分かりましたからその危ない発言は止めてください。伊那が現実逃避し始めたんで」

榊は伊那へ歩み寄るが、ものすごい勢いで距離を取る。

「わ、私美味しくないです！ 男じゃないです！ 邪気退散！ 悪霊退散！」

「何でそこで悪霊が出て来るんだ！」

「あっはははははははは！！ お前の彼女最高っ！ 邪気退散、悪霊退散……あっははははは！ 日比谷、お前人間扱いされてねえし。悪霊、悪霊って……」

「誰のせいだと思っているんですか……。伊那、安心しろ。俺もこ

の人も同性愛者じゃない。」

涙目で榊を見つめる。顔には疲れを浮かべていた。榊へとゆつくり歩み寄る。横目に男性を見ると、まだ腹を抱え爆笑していた。笑いが収まると前髪を鬱陶しそうに掻き上げる。

「と、お前が巡回中に消えるからだよバーカ。デートか何かかは知らないが……。彼女をこんな時間に連れ回すのはどうかと思うぜ？ この時間は奴らもともと活動する時間なのは分かっているだろ？ まだ入団１年とはいえ自覚が無さすぎる。制服を何故着ていないか、よく考えろ。俺はエーリュションを出る時言ったはずだ。つか、何可愛い彼女作ってんだよ。紹介しろよ、紹介。だからモテ男は嫌いだ。俺がお前にああいふ絡みをする理由も分かっているだろ。聞きたくなければ行動を変えればいい。それだけの事だ。いいか？ 俺達はな」

「長い！！」

榊の声には苛立ちが込もっており、今にも刀を抜きそうな雰囲気を出している。

ひっそりと溜め息を吐き伊那はその場に座った。二人のやり取りに入る以前に忘れられている気がするのだ。

途端に榊が伊那の横に腰を下ろした。紫髪の青年は頭を掻きながら辺りを見回す。

「日比谷、奴らの動く音するか？ 匂いがしねえから大丈夫だとは思っているんだが。彼女を逃がす為にも退路があるのかくらい確認しておきたい。というより、家に帰してやらないとな。俺らは寒くねえけど、彼女寒そうだし」

「音もしないですから大丈夫だとは思いますが。靖の結界も消えていますから」

紫髪の青年が頷く。

家の話しが出てから何があつてここに来たかを話そうとしたが、話すタイミングが見当たらない。２人は先程から伊那が入っていないような会話をしている。恐らく今しているのは榊が言ってい

た裏世界の事。青年がどうかは分からないが、榊は伊那に裏世界へ入ってほしくないような態度を取っていた。ならば、入るわけにはいかない。

気付けば目の前に青年の顔があった。心配そうに見つめる目。そこには驚きを浮かべた伊那自身が映っている。

「……悪いな。色々怖いだろ？ まだ俺達の力を全部見せてないから帰れる。そこは安心していいぜ」

大きな手が頭を撫でる。その手に心が少しだけ安心した。いつの間にか、榊に手を握られている。意を決し、顔を上げた。

「私、家から逃げて来たんです」

その言葉に二人が目を見開いた。

「家出！？ 虐待か？ それとも、包丁持ったチビデブハゲがハアハア言いながら乗っかって来たとか！？」

「違います！」

そんなのだつたらまだマシ、と呟くが二人には聞こえなかったようだ。言葉を選びながら分かりやすいように伝える。

「私には見えなくて、榊さん達が見える奴ら？ が居て」

2人は目を見開き辺りを見回す。どうやら嫌な感じが居る気配は無いらしい。家から少し離れているからかもしれない。

「俺と伊那が会った場所からこの公園まで約1 km。あそこから家までどれくらい分かるか？」

「分からないですが、そんなに離れてないと思います」

「よし、そこまで案内しろ日比谷。そこに行けば匂いもするだろうしな」

青年が指を鳴らしながら立ち上がる。

服に付いた砂を手で叩き落としながら立ち上がると、青年に手首を掴まれた。声を出して驚くより早く、青年の手が榊によって離される。

「……えっと……」

2人を見ながら困惑の声を出す。また視線をぶつけている。基本

的には仲が良いようだが、この衝突を見ていると犬猿の仲にしか見えない。気付かれないように溜め息を漏らす。

「とりあえず、行きましようよ」

その言葉でようやく2人の視線が離れた。榊は伊那の手を引き来た道を戻っていく。慌てて青年が後を追う。歩きながらも愚痴愚痴言っているようだが伊那には聞こえない。しかし、手を引く榊の手に力がこもっていく。どうやら聞こえているらしい。そつと表情を見ているが、想像通り苛々していた。声をかけるのも怖いので止めておく。触らぬ神に祟り無し。

「佐渡さん、ここです」

何事も無く伊那と榊が会った場所に辿り着いた。榊と青年は着いてから同じ方向へ視線を向けている。その方向こそ伊那の家がある方だ。伊那は家の方へと歩を進める。

「おいおい、何だよこの匂い。混ざりまくってて何が何だか分かんねえよ。それほど数が多いのか、それとも」

「新たな何か……ですか」

伊那を守るように2人は前に出る。ゆっくりと道を進んでいく。家に近づく程嫌な感じも近付いていた。伊那が家を飛び出した理由はまだ家の中に居る。3人はそう確信した。

気が重くなるにつれ足が遅くなっていく。

それに気付いた榊達は足を止めた。

「……確か見えないけど何か感じるんだったよな」

榊の言葉に小さく頷いた。

「なーんかヤバイ感じだなあ。日比谷、ちょっと制服持って来い。さすがに私服ってのは心許ないし、上着だけでいいから欲しいな。力を使うだろうし、本格的な戦いになると思う。制服が無いと憑かれる可能性もある。本当だったらフル装備で臨みたい所だが、着替える時間も無い。それに、この姿を見られると昼の行動がし難い。血を浴びたら目立つしな。辺りに血を残すのもヤバイ。警察に見つかるわけにもいかないんだ。特にお前の場合は学校もあるだろ。俺

は教師だからいいけどよ、高校生なんだから高校生活を楽しみたい  
だろ。下手すれば私生活まで無くなる。俺達は影として夜に、闇に  
生きなければならぬんだ。元々」

どうしたらいいか戸惑う。呼びかけにも気付かず話を止めない。  
無視されているような虚しさが入り込む。頼りの榊はどこかへ言  
っている。名前すら知らない青年をどう呼べばいいかも分からない。  
あの長話の中で自分の名前を口走ってくれたら楽なのだが、喋る気  
配は一向に無い。かといって長話の途中に口を挟む勇気など無い。  
せめて話を止めてくれれば聞ける。息継ぎのタイミングを探って  
はいるが、そもそも息継ぎをしているのかさえ分からない。止めれ  
る榊がいつ帰ってくるのかも分からない。凄まじいマシンガント  
クが嫌でも耳に入ってくる。

「ちよつとうざくなってきたかも」

気付かれないように呟く。先程から気付かれないようにこそそ  
するのが多い。その事がさらに疲れを呼ぶ。

伊那の疲れを知らず、青年は未だに喋り続けている。いつの間  
に身振り手振りが加わっていた。何やら熱演しているらしい。

「ということだ。だから俺達はこういう制服を着てだな」

まだ続いている。いつまでこれは続くのだろうか。

榊がどこに行ったのかは分からない。恐らく青年の言う制服を取  
りに行ったのだろう。正直、一緒に行きたかった。そうすれば延々  
とこの長話を聞かなくて済んだ。せめて受け流す術を教えるから行  
って欲しかった。

などと思いつつ本日何回目かのため息が漏れた。慌てて口を手で  
抑えるが、青年は気付いていないらしい。

「だからお前は俺、佐渡大毅に勝てないんだよ。分かるか？ 負け  
犬の遠吠えは弱い奴の象徴だぞ」

犬が本当に遠吠えをしただけであり、榊はここに居ない。意を決  
し大毅のシャツを掴む。

「あつ、あの、大毅さん！」

呼び止めたは良いものの続きを考えていなかったために口ごもる。  
大毅の大きな手が伊那の頭を優しく撫でた。

## 一章 第三話

いつの間にか長話が終わっており、頭には大毅の手が置かれている。頭一個分以上身長が高い大毅を見上げた。

大毅は先程までと全く違う優しい笑みを浮かべている。長話をしている時の馬鹿みたいな面影は一切無い。

「何か聞きたい事でもあるか？ 百面相してたけど」

大毅なりに気遣っているらしい。それ以前に見ていたならもっと早く長話を止めて欲しかった。おそらく榊が居ない事も気付いている。

よく分からない人。それが第一印象だ。

「おーい、百面相しすぎ」

その言葉で我に返る。

彼の事は考えても無駄だ。

思考を切り替え、聞きたい事を整理する。聞くなら今しかないのだ。裏世界、見えない何か、二人の事、嫌な感じの事など。何から聞こうか迷う。

だが、同時に聞いてはいけない気もするのだ。迂闊に聞けば裏世界の住人になってしまうような。

無くなった記憶と何か関係があるかもという期待もある。

考えれば考えるほどどうすればいいか分からなくなっていく。

様々な感情を悟ったのか大毅はゴツゴツした大きな手で伊那の髪を優しくかき混ぜた。

「ああー！！ 何するんですか！？」

慌てて髪を手櫛で整えた。

大毅はお腹を抱えて笑っている。悪い悪い、とか言っているが本当に悪いと思っているのだろうか。そう思うとため息が出て来た。それを聞いて大毅はようやく笑い終える。今度は優しく頭を撫でた。

思っていたより良い人なのかもしれない。あの長話をしている時と今では雰囲気は全く違う。それ故に性格が掴めない。

「お前面白いな」

「あなたに言われたくないです」

「ごもつとも」

どうやら自覚はあるらしい。

大毅は一息吐くと電信柱に背を預けた。街灯に照らされる表情はどこか儚い。伊那は一つの仮説を頭に浮かべたが、口にしようとは思わなかった。大毅の触れてはいけない部分に触れてしまいそうで月を見上げていた大毅の顔がいつの間にかこちらへ向けられていた。

「とりあえず、簡単に説明する。俺は佐渡大毅でもう一人が日比谷榊。聖蓮勅騎士団に所属している除霊師だ」

「せーれーじん……？ 除霊師って幽霊とかの？」

「漢字は聖なる紅蓮の勅な。まあ組織の名称だよ。ギリシャ神話に歌が上手い魔女か何かのセイレーン<sup>セイレーン</sup>っているだろ。聖蓮はそのセイレーンを漢字にしたんだ。勅は刃<sup>ヤイバ</sup>の意味。つまりセイレーンのために武器を持って立ち上がったナイトの集団ってことだ。大雑把に説明するとこんな感じか」

これで少し疑問が減った。裏世界とは組織の事。おそらく大規模で公に出来ないもの。ヤクザのようなものか。制服というのも組織のものだろう。榊が戻ってくるのを待っている事から察するに、組織の本拠地は近くにあるらしい。

ふと違和感を感じ辺りを見渡す。静かすぎる。虫の鳴き声すらしない。不自然な静気さに胸がざわつく。

大毅もそれに気付いたらしくすぐ動ける体勢になっている。

刹那。体突き飛ばされた。尻餅をつき先程まで居た場所を見る。渦。そう呼ぶのが相応しい物が浮いていた。ブラックホールのように周りを吸い込んでいるらしく、葉や砂を纏っている。

「異形」

無意識に言っていた。咄嗟の事で頭が混乱する。何故これを知っているのか。

そんな事を考えていたため、目の前までそれが接近している事に気付けなかった。

「伊那あつー！」

大毅の声で気付くが時遅く、目を固く瞑る。だが、痛みも衝撃も来ない。恐る恐る目を開く。

そこには大毅が左腕から血を流し立っていた。腕には渦が絡んでいる。

伊那は足が竦みその場から動く事が出来ない。止めて。そう言いたいのに声が上手く出せない。先程までとは比べ物にならない嫌な感じ。気を抜けば座り込んでしまいそう。

渦、異形は肉を裂き骨へ到達したらしく嫌な音が響き渡る。血がコンクリートの上へ落ち、水溜まりのように広がっていく。

大毅の膝が血溜まりの上に落ちた。

叫び声を上げることも出来ず頭だけが瞬時に理解する。骨をも切り裂かれ始めたのだ。

大毅は痛がる素振りも見せず異形を睨んでいる。

ふと、頭を撫でてくれた手を思い出した。ゴツゴツしていたが、心地よい手。また撫でて欲しい。長話でも何でも聞くから、また、笑ってほしい。

そう思った瞬間、口が自然と動いていた。

「異形を除霊しなさいアレース」

紡がれた言葉の意味などは全く分からない。だが、大毅は分かっていたようだ。

コンクリートに広がった血が群青の光を放つ。光は螺旋を描きながら槍へとその姿を変える。

大毅は動かせる右手でそれを掴み異形に突き刺す。異形が大毅の腕から離れ逃げようとするが、逃げる隙も与えず追撃を加えた。

異形は悶えるように震え動かなくなると、群青の光を発しながら

消えていく。

不謹慎にもそれが綺麗だと思ってしまい光が消えるまで見つめる。月明かりに生えるそれは蛍のようだ。槍も大毅の手の中で群青の光となり消えていく。

光が完全に消える。それと同時に大毅が倒れた。

「大毅さん!？」

慌てて駆け寄ろうとするが、大毅によって静止された。立ち上がろうとしても上手く起き上がれない大毅に、居てもたってもいられず駆け寄る。

「く、るな……」

絞り出された声を見殺し、家の扉に背を預け座らせる。息が荒く血も止まらない。

上着を脱ぎ大毅の左腕へ巻き付ける。頭にある知識をフル活用してもこれしか浮かばない。どうしたらいいか分からず涙が出て来た。途端に指が視界が暗くした。

「だ、い……じょーぶ……」

涙を掬う手を握り締める。涙を止めようとしているが、中々止まらない。大毅の表情すら見る勇気が無い。大毅は伊那を庇ったせいで大怪我を負ったのだ。

伊那が居なければ大毅は怪我をする事なく戦っていたはず。

「……ご、めんな……さ……」

「だ、いじょうぶ……大丈夫……だか……ら」

大毅は手を握り返してくれが、力の弱さに涙が出て来る。あの長話も出来ないのだ。

記憶さえあれば何とかなったかもしれない。そんな考えを頭をよぎる。

ふいに頭を軽く叩かれた。涙を乱暴に拭い顔を上げる。

「さ、かき……さん……」

「よお、遅……かった、な」

柵は荒い息を整えもせず大毅を背負った。大毅は子供っぽい笑顔

を浮かべながら意識を失う。伊那を安心させようと意識を保たせていたのだろう。

「榊君は大毅君を連れて帰りなさい」

知らない男性の声に不安を覚える。

「急いで啓君に治療してもらってください。大毅君の仕事は俺がしますから」

「分かりました。でも」

一瞬榊と目が合う。心配してくれているのだろう。でも――。

「私の事なら大丈夫です。大毅さんを助けてください」

伊那の言葉で意を決したらしく、榊は走り出した。

正直、見知らぬ男性と二人なのは嫌だ。でも、守ってくれた大毅を助けたかった。骨まで傷付いたかもしれない。

「ああ、言い忘れていました」

声の主がゆっくりと姿を現す。スーツにメガネ。どこからどうみてもインテリ。社長と言われても納得出来る。髪はのベリーショート。瞳は灰色をしている。

「そんなにじつと見られても困りますよ」

「あつ………すいません」

困ったような声だが表情は一切変わっていない。溜め息を吐きながらメガネを中指で上げる。

「さて、大毅君の槍を見た以上、ただでは帰せませんが」

「え？」

裏世界に巻き込まれなくなかったら。榊の言葉を思い出す。思わず後退るが、男性は伊那を追い詰めるように前へ出る。

「そこで、いくつか選択肢があります。一つは記憶の消去。ただし後遺症などが残る可能性もあります。もう一つは俺達に保護される。ただし、拘束させていただきます。異形を感じる力も利用させてもらいます。もう一つは」

男性は目を細め扇を開いた。

「俺に大人しく殺されるか、です。紫来梓伊那さん」

「どう、して」

「あなたの事は軽く調べさせていただきました。とりあえず、梓伊那さんの家に行きたいのですが、宜しいですか？」

拒否をさせない威圧感に伊那は頷く。扇をゆっくり扇ぎながら歩き出した男性の後を追う。それから一度も言葉を交わさないまま家に着く。時折見えた男性の顔はどこか悲しそうだった。

家の中に入ると無意識に携帯を開いた。恐らく癖だったのだろう。待ち受けにしてある少女の笑みに心が安らぐ。ふと視線を感じ男性を見る。

「感じますね？」

男性の言葉に頷く。あの嫌な感じが徐々に近づいて来る。姿が見えたら異形。見えなかったら別の何か。胸がざわつく。気配が強くなるにつれ、足の震えが大きくなる。

「おや、カリユブデイスより禍々しいですねー」

どこか楽しそうな男性の声。

「カリユブデイス？」

「先程の異形ですよ。いわゆる名前です」

男性は懷から扇取り出した。

それは通常の物より二回りほど大きく、窓から入る月光を浴び輝いているように見える。大毅のように血が武器に変わるという事は無いらしい。

「梓伊那さんは俺の後ろから動かないようにしてください。あなたの事は俺が守ります」

「あの、あなたは」

「……玖珂弥です」

少し躊躇うような間があった事に疑問を浮かべる。声音もどこか悲しげだった。

凄まじい破壊音が鳴り響く。土煙が上がる中、それは二階から落ちてきた。

玖珂弥が扇を開く。

鉄を擦り合わせたような音が鳴る。玖珂弥が持っているのは鉄扇なのだ。

「新種ですね。ケルベロスでしょうか」

不適に笑うと、突進してきた異形を鉄扇で受け止める。異形を弾き返し構え直す。

見た目は犬。いや、狼だ。一つの胴体から三つの頭が出ている。それぞれ顔付きは若干違うが、表情は同じだ。鋭利な牙を剥き出し、毛は逆立だっている。目に瞳は無い。深紅に染まったそれで玖珂弥を睨み付けている。

「梓伊那さん、犬は好きですか？」

「えっ！？ えっと、普通の犬なら好きです」

「それは良かった。あれは普通では無いですからね。好きって言われたらどうしようかと思いましたよ。少し残虐的な事をしますから」  
言いながら玖珂弥は一瞬で間合いを詰めた。鉄扇を右の首へ突き抜き、右足で胴体を蹴り飛ばす。その勢いを利用して鉄扇を引き抜く。

血飛沫が舞い上がる。右首が胴体から切り離され床を転がり、深緑の光を放ちながら消えていく。

「色が違う……」

舞うように鉄扇を振るう玖珂弥。返り血も光となっていくため、玖珂弥が光っているように見える。

気付けばケルベロスの原型は無い。頭は一つしか無く、足も三本だけ。

「これで、終わりです」

刹那、玖珂弥が鉄扇で何かを受け止めた。歯を食いしばり耐えるが、耐えきれず体が飛んだ。壁に激突し鉄扇を落とす。

「玖珂弥さん！！」

慌てて玖珂弥へ駆け寄り体を支える。ケルベロスの方を見た瞬間、目を疑った。

ケルベロスが一体増えているのだ。

追い討ちをしようとゆっくり二人へ近付く。

咄嗟に玖珂弥を見るが、衝撃が強かったのか動けそうに無い。ゆっくり立ち上がり両手を広げた。足が震えている。

「し、なさん……何を」

「彰宏さんには色々お世話になりましたから、あたしだって守りたいんです」

ケルベロスが牙を剥き跳び上がった。

が、轟音と共に壊された天井が降ってくる。土煙から出て来たのは刀を持った榊と、槍で土煙を裂いた大毅。二人は守るように立ち、ケルベロスを見据えている。

「怖かっただろ。よく、頑張ったな」

武器を構えながら言う榊に大きく頷く。

刀が火を纏う。大毅の周りには群青色の槍が無数に漂っている。

二人が絶対に守ってくれるという安心感で伊那から笑みが零れた。玖珂弥彰宏へ歩み寄り体を支える。

「悪しき心に支配された者よ。地獄の業火で罪を償うがいい」

一気に間合いを詰め刀を振るう。刀は交わされたが、刀が纏っていた火がケルベロスに絡み付く。間を置かず刀を横に一閃しケルベロスの体を二つに裂いた。

一方で無数の槍に囲まれた大毅は彰宏がしとめ損なったケルベロスと向かい合っていた。

「罪に染まりしその御身。慈悲無き刃で己の愚かさを知れ」  
ヤイバ

大毅の言葉が引き金となり槍が一斉にケルベロスを貫いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6110n/>

---

桜花乱舞

2010年11月10日23時55分発行